

〔提 言〕

家族看護学研究誌を身近なものに

北里大学

森 秀 子

「提言」などは私にとって大それたことですので、普段感じていることを述べさせていただきます。巻頭言で杉下理事長が言及していましたように、日本家族看護学会の会員数が600名を越え、他のいくつかの条件も整ったところから、日本学術会議の学術団体としての登録申請の準備が進められていることは大変喜ばしいことですが、同時に、研究誌の編集責任者として身の引き締まる思いがいたします。

昨年(1998年)の第5回学術集会の折、特別講演のために来日された、カナダ・カルガリー大学のJanice M. Bell先生が、懇親会の席で次のようにおっしゃって参加者を励まして下さいました。Bell先生は国際家族看護学誌の編集長でもあります。「国際家族看護学会は3年に1度開催されますが、例年の学会には世界各国から約600名の研究者・教育者・実践家が参集し、大盛会ですが、日本の一地方で開かれたこの学会にはほぼ同数の参加者があると聞いて驚き、また、日本の看護職者たちの家族看護学に対する熱気を感じました。どうぞ、ますます研鑽し国際的にも発展しますように」という内容でした。先日、来年の第5回国際家族看護学会への案内がBell先生と会長のKathleen Knafel先生からメールで寄せられましたので巻頭の色紙のページに紹介いたしました。このように研究発表の機会はどんどん拡大していますので、おひとりひとりがチャンスを生かし、日頃の研究を公に発表していくことを切望いたします。

しかしながら、私自身現実の厳しさをひしひしと感じているこのごろです。心掛けてはいるものの文章に著すのがたいへん難しいと、考えているのは私ばかりではないと思います。学術論文を書くことが

容易でないことは当然のこと、だからこそ専門的な修練の必要なことも重々承知ですが、昨今の学術集会参加者の層の厚さや領域の広さを目の当りにし、また、臨床(地)に携わっている看護職者の実践報告の例を見聞きしながら、すばらしい実践的研究が日の目を見ずに置き去りにされているのではないかと、しばしば感じました。これらの実践的研究をもっと公にして育てて行けないものか、たいへん惜しいと、思いました。もちろん、最初から高度な学術論文を完成することは困難かもしれませんが資料や報告、短報等の形式で貴重な実践・結果を整理しては公表することを積み重ねて行き、他の実践・研究者を初め、既に活躍している研究職、教育職、実践家等から率直な同意や批判、コメントを受けて内容に磨きをかけ、相互に育ちあいたいものだという思いが最近強くなっています。

カルガリーのエクスターンシップに参加した院生を中心に1年前から開始した「北里家族看護実践研究会」が、10回目を迎えますが、参加なさっている婦長さん方やベテランナースと話し合う度に是非ともこのことを実行したいと考えます。

家族看護学研究誌は第4巻から年2回発行されます。会員のみならず、日頃蓄えている考えを外に向かって発表する場として、この研究誌をどうぞご活用してください。

家族看護という広範囲の領域で看護援助に取り組む一人一人が基盤を固め、ますます有効な展開がなされますよう、家族看護学研究誌が少しでもお役に立てばと、念じています。